



都市と地域の人をつなぐ

里都(さと)プロジェクト

第三回・里都づくりフォーラム開催レポート

【開催日:2012年3月13日(火)】

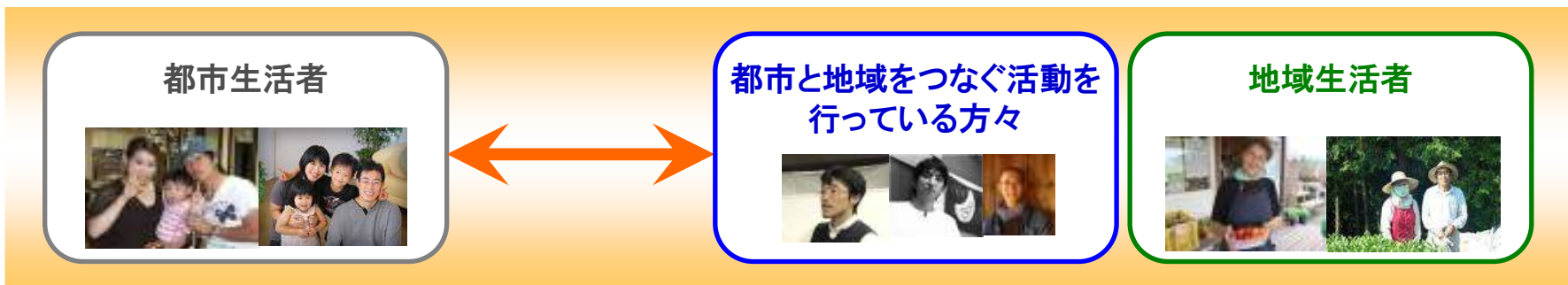
都市と地域の人をつなぐ
里都プロジェクト

「里都(さと)プロジェクト」について

里都(さと)プロジェクトとは、
「都市」と「地域」との新しいつながり方・関わり方を、実践から学び、考えていくプロジェクトです。

「持続可能な幸せを感じる社会づくり」、重要なキーワードだと思います。
この新しい社会づくりのためには、「都市」と「地域」との新しい関係性を模索し、先行事例に学び、育んでいくことが重要ではないかと考えています。

そこで里都(さと)プロジェクトでは、
「様々な地域で、都市と地域をつなぐ活動を行っている方々」と、
「都市に住み、地域との縁をつくりたいと考える方々」との出会いの場をつくり、
お互いが学びあい、双方にとって新しい関係性を培うきっかけづくりに取り組んでいきたいと考えています。



【里都プロジェクト】

- ・コアメンバー: 大木浩士、有福英幸、濱谷玲子
- ・主な活動内容: ネットワークづくりフォーラムの企画運営、WEBサイト等による情報発信、地域体験ツアーの企画運営、など
- ・WEBサイト: <http://www.satopro.jp/>
- ・お問い合わせメールアドレス: info@satopro.jp

第3回・里都づくりフォーラム 開催概要

*****■夕

イトル： 第三回・里都づくりフォーラム

■ゲスト： 高橋優子さん(埼玉県小川町)、株式会社OKUTA・玉井さん

■開催日時： 2012年3月13日(火) 19:00~21:30ごろ (開場 18:30)

■開催場所： 日比谷図書文化館 (住所:東京都千代田区日比谷公園1番4号)

■参加者： 40名

■本日のプログラム内容

- ー高橋さんから、埼玉県小川町の取り組みのお話(株式会社OKUTAのこめまめプロジェクトを中心に)
- ー高橋さん、OKUTAの玉井さんへの質問
- ー参加者同士の対話を実施



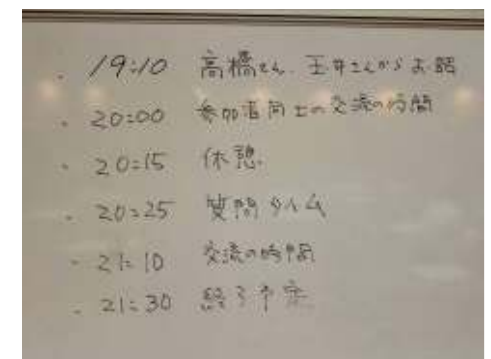
=====
「特定非営利活動法人 生活工房つばさ・游」 理事長
「全国有機農業推進協議会」 理事
有機的協働マネジメントコーディネーター
=====

豊かな自然環境と人口3万人のコンパクトな街にひかれ、1989年、埼玉県小川町に移住。
2000年10月、地域のミニコミ誌の発行をきっかけに任意団体生活工房「つばさ・游」を結成。
2009年8月にNPO法人化。理事長を務める。

活動の柱の一つが町の資源(人・もの・金)をつなぐコーディネーター的な役割。環境とジェンダーを視点とした地域情報紙「小川町まっぷ」を2001年から、メールマガジン「小川町まっぷ」を2003年から発行継続中。具体的には、有機農業を基盤とした相互扶助型市民ネットワークのまちづくりに精力的に取り組む。

オープニング

参加者は43名。冒頭、「里都プロジェクト」発起人の大木から、「プロジェクト設立の背景」と「小川町の風景」についてご紹介をさせていただきました。



ゲスト:高橋裕子さん、玉井多映子さんからのお話

第3回フォーラムのゲスト(里都ナビゲーター)、NPO・生活工房「つばさ・游」理事長の高橋優子さん、株式会社OKUTAの玉井多映子さんより、小川町の取り組みと「こめまめプロジェクト」の概要についてお話をいただきました。

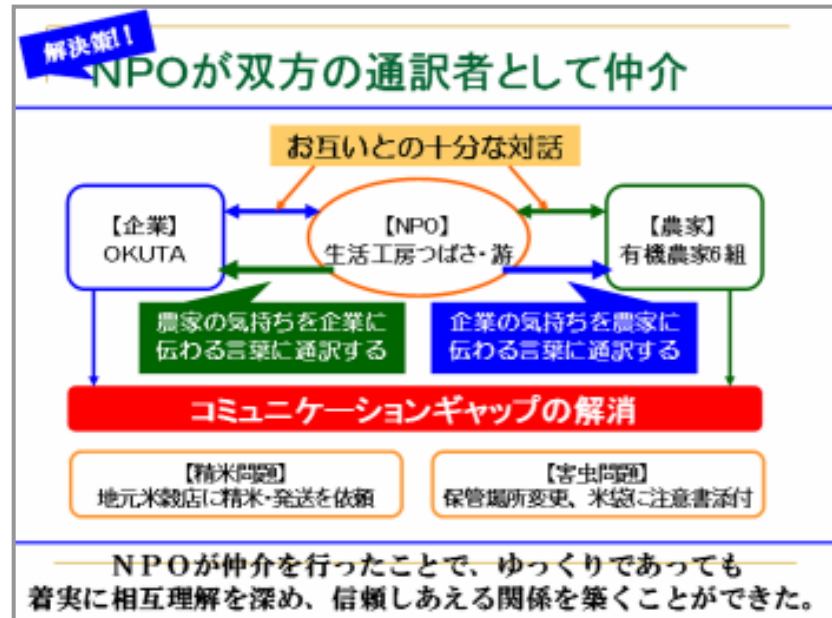
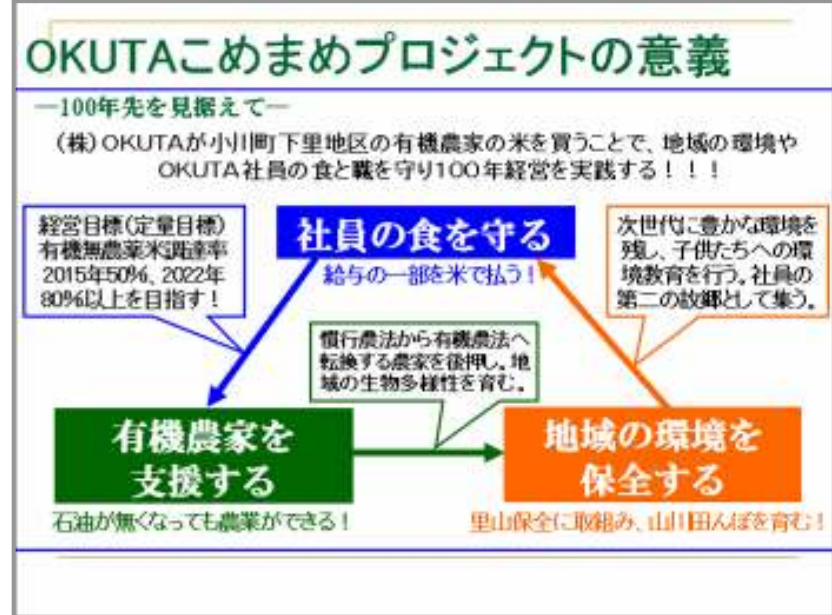
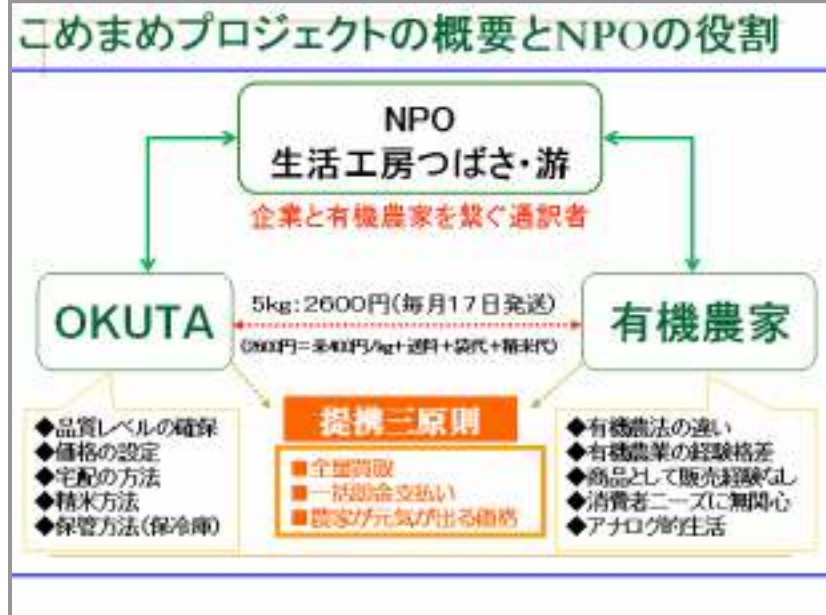


★日本初 企業C S A (Community Supported Agriculture)
地域の企業が地域の有機農業を支え環境を守る
さいたま市のリフォーム会社(株)オクタによる
「こめまめプロジェクト」

賛同する社員の給料の一部をお米で支払っている

(埼玉新聞2009年3月26日)

ゲスト:高橋裕子さん、玉井多映子さんからのお話



ゲスト:高橋裕子さん、玉井多映子さんからのお話

◆生活工房 つばさ・游 高橋さんより

・小川町は、池袋駅から電車で70分ほどの場所にある町です。周囲を山に囲まれ、里地里山の風景が広がるところです。古くから地域資源を生かし、建具、絹、和紙が伝統産業として栄えていました。

・私が小川町に引っ越してきたのは、1989年のことです。子供を育てるのによい空気、よい水があると思いました。小川町で家を買って骨をうずめる覚悟をした時の条件は、「自分が自分らしく生きれる町」として小川町は「自分が埋もれないでいられる」と思える適度な人口で、文化があり、歴史があり、人との出会いがあるなど、いくつかの条件が揃っていました。

・小川町に住むことを決めた後、私は「自分はこの町で自分らしく生きていくためにいったい何ができるか」を考えました。それが今の活動をスタートするきっかけでした。

・小川町に住み4年半ほどたったころ、「自分は小川町のことを知らないな」と感じました。役場について情報を集めてみましたが、表面的な情報しか集まりません。私が欲しい情報は、「どこにどんな人が住んでいて、どんな活動をしていて、どんな考えをもっているか」でした。

・そこで、女性ならではの暮らしの目線から、そのような情報を集める活動を始めました。その時に作ったミニコミ紙が「小川町マップ」です。第一回は「豆腐屋さんマップ」でした。この小川町マップをつくるため、任意団体「生活工房 つばさ・游」を立ち上げました。

・「小川町マップ」は年に4回発行しており、現在も発行を続けています。(現在は年1回)取材を続けていく中で情報が集まりだすと、「点」だった情報が「線」になります。そして「線」が集まり「面」になっていきます。そこで私たちは、2009年に生活工房「つばさ・游」をNPO法人化し、「①顔と顔の見える相互扶助の市民共生ネットワークの仕組みづくり」「②小川町の里地里山環境が生み出す豊かな地域資源の活用による、食とエネルギーの自給モデルの構築」「③町づくり・人づくりの観点からの研究提案」「④普通の市民が普通の価格で有機農産物が買える仕組み作り」に向け本格的な活動を開始しました。

・小川町の有機農家と主婦が協働する日替わりシェフレストラン『ベリカフェつばさ・游』の営業も、その活動の1つです。

・さて、リーマンショックがあった年、小川町で作った有機米が1.8トン売れ残りました。そのことを、霜里農場見学会で小川町に来られていた株式会社OKUTAの山本社長にお話すると、「すべて当社で買い取ります」とのご返事をいただきました。

・山本さんは、賛同する社員にお米を配り、そのお米代を社員の給料から天引きするという仕組みをつくりました。これが「こめまめプロジェクト」がスタートした経緯です。

◆株式会社OKUTA 玉井さんより

・株式会社OKUTAは、今年で設立20周年をむかえるリフォーム会社です。2002年から、化学物質を極力つかわないリフォームに転換し、環境負荷を減らす取り組みを企業ぐるみで進めています。

・「こめまめプロジェクト」では、小川町の有機農家さんに作っていただいたお米を、OKUTAが1年間分「全量を買取る」ことを取り決めています。費用は一括即金でお支払いし、「農家さんの元気がでる価格」で買い取ることを原則としています。

・「5kg=2600円」を1つのパッケージとし、希望する社員に希望する口数だけ小川町から送っていただいています。

・「こめまめプロジェクト」を推進する意義は、私たちが有機農家さんのお米を買うことで、地域の環境を守り、OKUTA社員の『食』と『職』を守り、「100年経営」を実践することです。

・私たちは「石油がなくなっても続けていける農業」を支援していきたいと考えています。そして農薬や肥料がなくても農業を続けていくことができる「有機農業」を支援していくことを決めました。

・私たちは小川町の里山の保全も行っています。山を守ることで、田んぼに流れてくる水を守ることができるからです。

・これら小川町との取り組みは、田舎のない社員に「第二の故郷」をつくるという役割もありました。

ゲスト:高橋裕子さん、玉井多映子さんからのお話

- ・さて、この「こめまめプロジェクト」ですが、実はプロジェクトがスタートした翌月にトラブルが起きました。有機のお米を受け取った社員からクレームが入ったのです。消費者である社員にとっては、「いつでも品質が同じなのはあたりまえ」でした。しかし届いたお米は「先月とは違う色」をしていました。
- ・農家さんからすれば「お米は農産物。同じものはできない」との認識を持っています。トラブルは、この2者の価値観の違いから起こったものでした。
- ・このトラブル解消のため、クレームを言ってきた社員と農家さんとで直接話をしてもらうことにしました。しかし価値観の違う者同士、トラブルはさらに大きくなってしまいました。
- ・お米に虫がわくことも、両者のトラブルの原因になっていました。これらの問題解決のため、高橋さんに間に入っていただき、双方の通訳者としてコミュニケーションギャップを埋めていただきました。

◆高橋さんより

- ・私が行ったのは、農家さんの気持ちや農業の現場の状況を、社員の皆さんにお伝えすること。そして、消費者の気持ちを農家さんにお伝えし、理解していただくことでした。
- ・そのようなことを少しずつ行うことでお互いの理解が深まり、課題解決のための取り組みがはじまっていきました。届くお米の色が違う点は、間に精米屋さんに入っただき、お米の品質をそろえることで対応しました。虫の問題については、お米は「生鮮食料品」であることを社員の皆さんにわかっていただき、冷蔵庫で保管をしていただくようお願いをしました。
- ・このようなコミュニケーションギャップを解消するために、「双方の顔が見える関係づくり」にも少しずつ取り組んでいきました。去年は、OKUTAの皆さんに小川町に来ていただき、お米づくりを体験していただきました。
- ・このような活動により、農家さんに変化が起きました。顔が見える関係ができますと「美味しいお米を食べてもらいたい」と考えるようになります。美味しいお米を作るためには「土」が重要です。そこで農家さんの間で「土壌分析」が行われ、学習会が始まりました。今までなかった動きです。

◆玉井さんより

- ・OKUTAの社員にも様々な変化が起きました。本社屋上にあったハーブ園を拡張し、畑をつくり、社員がそこで農作業を行うようになりました。
- ・去年の3月11日以降、スーパーの棚から食品が消える中、3月17日には小川町からお米が届きました。これは社員に大きな安心感を与えました。「お米の価格が高い」と言っていた社員も、「安心感を思えば高くない」と考えるようになりました。
- ・また、休日にまるで自分の故郷にかえるように小川町に足を運ぶ社員が増えていきました。
- ・去年、田植えに参加した社員やその家族は50人にもなりました。稲刈りや収穫祭も行いました。それらは社員の家族間のコミュニケーションにとっても、よい影響を及ぼしました。

◆高橋さん

- ・生産者である農家さんと消費者であるOKUTAの方々との交流会も行いました。「消費者と直接話をする」、それは農家さんにとって初めての体験でした。この交流会によって、双方の関係性はさらに深いものになりました。
- ・このようなOKUTAさんとの交流は、農家さんにとって「自分達の農業の意義を再確認する」きっかけにもなりました。
- ・小川町では、地域の有機農業を支えるお店などもたくさんあります。マルシェ、レストラン、地ビール、とうふ屋さんなど。地域の有機農家さんを、地域の消費者やOKUTAさんのような企業が支えていく。このようなモデルづくりを小川町では進めています。
- ・この「有機を支える仕組み」により、農薬を使わず、生態系が守られ、安心な空気・安心な水が守られます。そのことにより再生産可能な、持続可能な社会が作られていくと私は考えています。
- ・「地域の資源から得られる恵み」を皆で分け合い、関係者それぞれの利益は小さくとも大きな安心が得られる暮らし(小利大安)を目指していきたいと思っています。

参加者同士の対話

各テーブルごとに自己紹介を行っていただき、「高橋さん、玉井さんのお話を聞いて印象に残ったこと」などについて話し合いの時間を設けました。



質疑応答

里都プロジェクトスタッフや参加者の皆さまより、高梁さん、玉井さんに質問をさせていただき、ご回答をいただきました。





4年目を迎えた「OKUTAこめまめプロジェクト」
OKUTAの社員、下里地区の農家さんに変化が起きた。



関わる人、全てが幸せに。

— “小利大安” の下里モデル —



地域の資源から得られる恵みを皆で分け合い、関係者それぞれの利益は小さくとも大きな安心が得られる暮らしを目指します。